

【 聖枝祭のアポリティキオン 第1調 】

ハリスト スか みよ 、 なんぢは おのれのくるしみ
 神 爾 己 苦
 の さ き に い っ ぱ ん の ふ く か つ を し ん ぜ し め て 、
 前 一 般 復 活 信
 ラザリを しよ り お こ し た ま え り 。 ゆ え に わ
 死 起 給 故 我
 れ ら も ど う じ の ご と く し ょ う り の し る
 等 童 児 如 勝 利 徽
 し を と り て 、 な ん ぢ し の し ょ う り し ゃ
 號 取 爾 死 勝 利 者
 に よ ぶ 、 い と た か き に オ サ ン ナ 、 し ゅ の
 呼 、 至 高 主
 な に よ り て き た る も の は あ が め ほ め ら る 。
 名 因 來 者 崇 讚

【 讃詞 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き 歸
 光 榮 父 子 聖 神
 す 、
 ハリストス わ が か み よ 、 わ れ ら は せん を も っ て な
 我 神 我 等 洗 以 爾
 なんぢと と も に ほ う む ら れ て 、 なんぢの ふ く か 活
 借 葬 爾 復 活

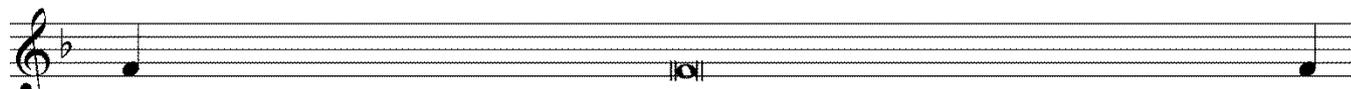
つによりてふしのいのちをえ得て、か
 由 不 死 生 命 得 歌
 しょうしてよぶ、いとたかきにオサア
 頌 呼 至 高
 ナ、しゅのなによりてきたるものはあがめほ
 主 名 由 来 者 崇 讚
 めらる。

【 聖枝祭のコンダック 第6調 】

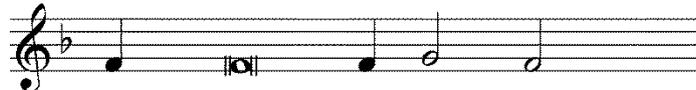
いまでもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世 世
 てんにはほうざに、ちにはわかきうさぎ
 天 寶 座 地 小 驢
 うまにのせらるるハリストスカみよ、なんぢは
 乗 神 爾
 しょてんしのさんび、しよしのかしょうをうけたま
 諸 天 使 讚 美 諸 子 歌 頌 受 給
 えり。かれらなんぢによべり、アダムを
 彼 等 爾 呼
 よびおこさんためにきたるしゅよ、なんぢ
 喚 起 爲 来 主 爾
 はあがめほめらる。

【 聖三の歌 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、



しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
主 敬 虔 者 救 及 我

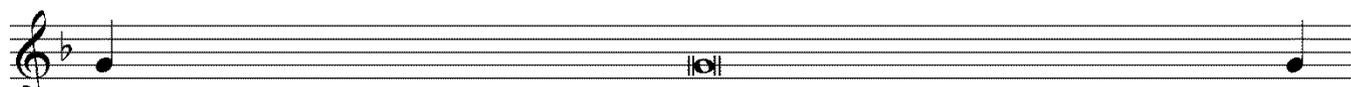


らにききたまえ。
等 聆 給

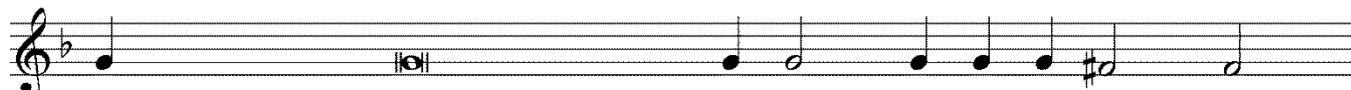
代禱) ^{よよ}世世に、



ア ミ ン。



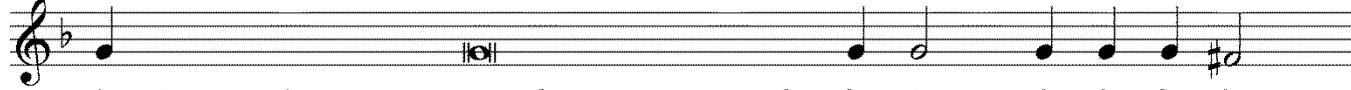
せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖



じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐



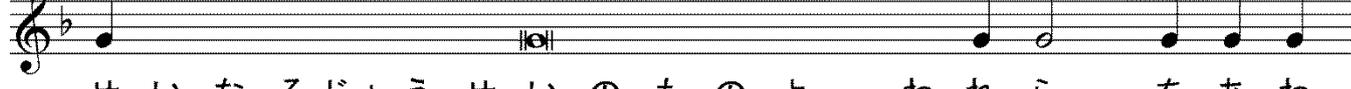
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖



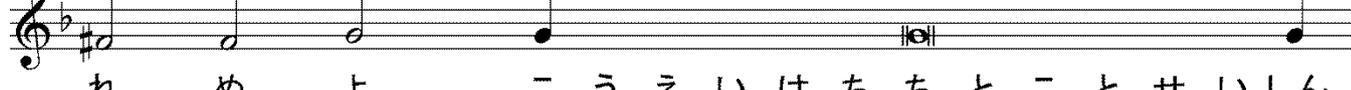
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐



めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅



せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐



れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何時 世 世

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。
 憐

【 提綱 (プロキメン) 】

代禱^{えいち} 睿智、

誦經) プロキメン、主^{しゅ}の名^なに依^よりて來^{きた}る者^{もの}は崇^{あが}め讃^ほめらる、主^{しゅ}は神^{かみ}なり、我^{われ}等^らを照^{てら}せり、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめらる、
 主 名 依 來 者 崇 讃

しゅはかみなり、われらをてらせり。
 主 神 我 等 照

誦經) 主^{しゅ}を讃^{さん}榮^{えい}せよ、蓋^{けだ} 彼^{しか}は仁^{じん}慈^じにして、其^{その} 憐^{あわれ}みは世^よ世^よにあればなり、

しゅのなによりてきたるものはあがめほめらる、
 主 名 依 來 者 崇 讃

しゅはかみなり、われらをてらせり。
 主 神 我 等 照

誦經) 主^{しゅ}の名^なに依^よりて來^{きた}る者^{もの}は崇^{あが}め讃^ほめらる、



しゅ は か み な り 、 わ れ ら を て ら せ り 。
 主 神 我 等 照

【 使徒經 (アポストロス) 247 端 フィリッピ書 4 章 4~9 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん たつ} フィリッピ人に ^{こうしょ よみ} 達する後書の讀、

代禱) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{つね} 恒に ^{しゅ あ} 主に在りて ^{よろこ} 喜べ、^{またい} 又 ^{よろこ} 言う喜べ。^{なんぢら} 爾等 ^{おんじゆう} の ^{しゅうじん} 溫柔は ^し 衆人に知らるべし。

^{しゅ} 主は ^{ちか} 近し。^{なにごと} 何事をも ^{おもんばか} 慮る勿れ、^{なか} 乃 ^{すなわち} 凡の事に於て、^{こと} 祈禱、^{おい} 祈願、^{きとう} 且 ^{きがん} 感謝を以

て、^{なんぢら} 爾等 ^{もと} の ^{ところ} 求むる ^{かみ} 所を ^つ 神に ^{しか} 告げよ、^{かみ} 然らば ^{へいあん} 神の平安、^{およそ} 凡 ^{ちしき} の知識に ^こ 超ゆる ^{もの} 者は、ハリ

ストスイスに於て、^{おい} 爾等 ^{なんぢら} の ^{こころ} 心と ^{なんぢら} 爾等 ^{おもい} の ^{まも} 念とを ^{これ} 守らん。之を ^{きわ} 究むるに、^わ 我が ^{けいてい} 兄弟

よ、^{およ} 凡 ^{まこと} そ ^{およ} 眞なること、^{とうと} 凡 ^ぎ そ ^{およ} 尊きこと、^{いさぎよ} 凡 ^{およ} そ ^{あい} 義なること、^{いさぎよ} 凡 ^{およ} そ ^{あい} 潔きこと、^{あい} 凡 ^{およ} そ ^{あい} 愛すべ

きこと、^{およ} 凡 ^{しょう} そ ^{いかに} 稱すべきこと、^{いかに} 如何なる ^{ほまれ} 徳、^{なんぢら} 如何なる ^{おも} 譽も、^{なんぢら} 爾等 ^{われ} 之を ^{われ} 念え。爾等 ^{われ} が ^{われ} 我

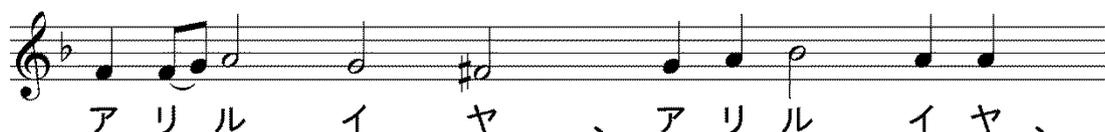
に ^{まな} 學びし ^{ところ} 所、^う 受けし ^{ところ} 所、^き 聞きし ^{ところ} 所、^み 見し ^{ところ} 所は、^{これ} 之を ^{おこな} 行え、^{しか} 然らば ^{へいあん} 平安の ^{かみ} 神は ^{なんぢ} 爾

ら ^{とも} 等と ^お 偕に居らん。

(比較用 口語訳) あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩つてはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであろう。最後に、兄弟たちよ。すべて眞実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純眞なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。あなたがたが、わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう。

【 アリルイヤ 聖枝祭主日 第1調 】

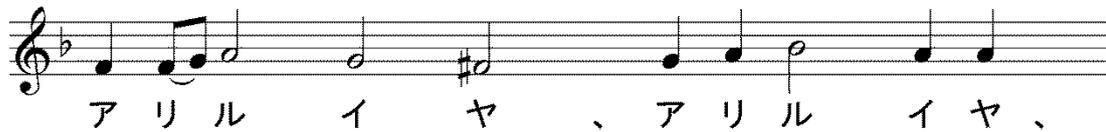
代禱) ^{えいち} 睿智、



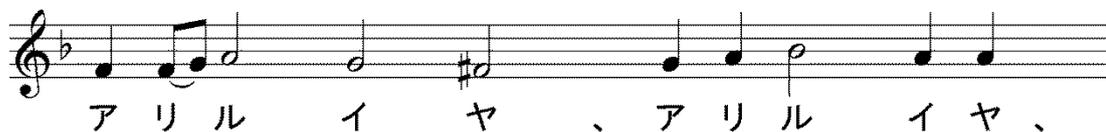
ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、



誦經) ^{あらた}新 ^{うた}なる ^{しゅ}歌 ^{うた}を ^{けだしかれ}主に ^{きせき}歌え、 ^{おこな}蓋 ^{おこな}彼は ^{おこな}奇跡 ^{おこな}を行 ^{おこな}えり、



誦經) ^{およ}凡 ^ちそ ^{はて}地 ^わの ^{かみ}極 ^{すくい}は ^み我が ^み神 ^みの ^み救 ^みを見 ^みたり、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書 41 端 12 章 1~18 節 】

代禱) ^{えいち}睿 ^{えいち}智、

誦經) ^{でん}イオ ^{せいふくいんけい}アン ^{よみ}傳 ^{よみ}の ^{よみ}聖 ^{よみ}福 ^{よみ}音 ^{よみ}經 ^{よみ}の ^{よみ}讀、



代禱) ^{つつし}謹 ^きみて ^き聽 ^きく ^きべし、

誦經) ^か彼の ^{とき}時、^{パスハ}逾越 ^{まえむいか}節 ^{きた}の前 ^{すなわち}六 ^{かつ}日、^しイ ^{かれ}イス ^{かれ}ス ^{かれ} ヴ ^{かれ}ィ ^{かれ}フ ^{かれ}ァ ^{かれ}ニ ^{かれ}ヤ ^{かれ}に ^{かれ}來 ^{かれ}れ ^{かれ}り、 ^{かれ}即 ^{かれ}ラ ^{かれ}ザ ^{かれ}リ ^{かれ}曾 ^{かれ}て ^{かれ}死 ^{かれ}して ^{かれ}彼 ^{かれ}が

^し死 ^{ふっかつ}より ^{もの}復 ^お活 ^{ところ}せ ^{かしこ}し ^{おい}め ^{かれ}し ^{ため}者 ^{ばんさん}の ^{もう}居 ^{もう}る ^{もう}所 ^{もう}な ^{もう}り。 ^{もう}彼 ^{もう}處 ^{もう}に ^{もう}於 ^{もう}て ^{もう}彼 ^{もう}の ^{もう}爲 ^{もう}に ^{もう}晩 ^{もう}餐 ^{もう}を ^{もう}設 ^{もう}け ^{もう}たり、 ^{もう}マル ^{もう}フ ^{もう}ァ

^{きょうじ}供 ^{かれ}事 ^{とも}し、 ^{せきざ}ラ ^{もの}ザ ^{ひとり}リ ^{ひとり}は ^{ひとり}彼 ^{ひとり}と ^{ひとり}偕 ^{ひとり}に ^{ひとり}席 ^{ひとり}坐 ^{ひとり}せ ^{ひとり}し ^{ひとり}者 ^{ひとり}の ^{ひとり}一 ^{ひとり}たり。 ^{じゅんりょう}マリ ^{じゅんりょう}ヤ ^{じゅんりょう}は ^{じゅんりょう}純 ^{じゅんりょう}良 ^{じゅんりょう}なる ^{じゅんりょう}「 ^{じゅんりょう}ナル ^{じゅんりょう}ド ^{じゅんりょう}」 ^{あたい}の ^{あたい}價 ^{あたい}

とうと においあぶら いっきん と 貴き香膏一斤を執りて、イススの足に膏り、己の髪を以て其足を拭えり、
 いえ においあぶら かおり み そのもと ひとり 家は香膏の香氣に満たされたり。其門徒の一、シモンの子イウダ「イスカリオト」、即
 かれ う ものいわ なん こ においあぶら ぎんさんびやく う まづ もの ほどこ
 彼を賣らんとする者曰く、何ぞ、此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さ
 ざりし。彼の之を言いしは、貧しき者を慮る爲に非ず、即竊者たるに因りてなり。
 かれ かねばこ も そのうち おさ もの たづさ 彼は金匣を持ち、其内に藏めたる者を攜えたり。イスス曰えり、彼を捨て、彼は我が
 ほうむり ひ ため これ たくわ けだしまづ もの つね なんぢら とも われ つね なんぢら
 葬の日の爲に此を貯えたり。蓋貧しき者は常に爾等と借にす、我は常に爾曹
 とも 借にするにあらず、イウデヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知りて、獨イススの爲の
 みならず、乃其死より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。司祭諸長はラザリを
 ころ ほか けだしかれ ゆえ よ おお 多くのイウデヤ人往きて、イススを信ぜ
 り。明日、節筵の爲に來りし衆くの民は、イススのイエルサリムに來るを聞きて、櫻欄の
 えだ と い かれ むか よ い しゅ な よ きた おう
 枝を取り、出でて彼を迎え、呼びて曰えり、「オサンナ」、主の名に因りて來るイズライリの王
 しゆくふく わかきうさぎうま え これ の しる ごと いわ
 は祝福せらる。イスス小驢を獲て、之に乘れり、録されしが如し、云く、シオン
 むすめ おそ なか み なんぢ おう わかきうさぎうま の のぞ かれ もんと はじめこれ
 の女よ、懼るる勿れ、視よ、爾の王は小驢に乗りて臨むと。彼の門徒は初此
 さと しか えい のち こ こと かれ さ しる かつこれ かれ
 を曉らざりき、然れどもイススの榮せられし後、此の事の彼を指して録され、且此を彼
 おこな おも おこ さき とも あ たみ かれ はか よ いたし
 に行いしを憶い起せり。先にイススと借に在りし民は、彼がラザリを墓より呼び出し
 これ し ふっかつ こと しょう これ よ たみ かれ むか けだしかれ こ
 て、之を死より復活せしめん事を證せり。此に縁りて民は彼を迎えたり、蓋彼が此の
 きせき おこな き
 奇蹟を行いしを聞けり。

(比較用 口語訳) 過越の祭の六日まえに、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中
 からよみがえらせたラザロのいた所である。イエスのためにそこで夕食の用意がされ、マルタは給仕を
 していた。イエスと一緒に食卓についていた者のうちに、ラザロも加わっていた。その時、マリヤは高
 価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、
 香油のかおりが家にいっぱいになった。弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテの
 ユダが言った、「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。彼がこ
 う言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預かっ
 ている、その中身をごまかしていたからであった。イエスは言われた、「この女のするままにさせておき
 なさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。貧しい人たちはいつもあなたがた
 と共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない」。大ぜいのユダヤ人たちが、そこにイエスのおら
 れるのを知って、押しよせてきた。それはイエスに会うためだけではなく、イエスが死人のなかから、

よみがえらせたラザロを見るためでもあった。そこで祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。それは、ラザロのことで、多くのユダヤ人が彼らを離れ去って、イエスを信じるに至ったからである。その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と書いてあるとおりであった。弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸